

## 10. 文学部

- I 文学部の教育目的と特徴 . . . . . 10- 2
- II 「教育の水準」の分析・判定 . . . . . 10- 4
  - 分析項目 I 教育活動の状況 . . . . . 10- 4
  - 分析項目 II 教育成果の状況 . . . . . 10-16
- III 「質の向上度」の分析 . . . . . 10-23

## I 文学部の教育目的と特徴

### 1. 学部の教育目的

文学部は、人間の思想、歴史、言語、社会に対する理解を深め、時間、空間を越えた知的財産の継承と創造に寄与しうる人材を育成することを主な目的とする(資料10-1)。この目的は、東京大学の第2期中期目標の前文「東京大学の使命」として掲げられている、「東京大学が育成を目指す人材は、自国の歴史や文化についての深い理解とともに、国際的な広い視野を有し、高度な専門的知識と課題解決能力を兼ね備え、強靱な開拓者精神を持ちつつ公共的な責任を自ら考えて行動する、タフな人材」の育成の一翼を担うものである。

#### <資料10-1 文学部学位授与方針(抜粋)>

[文学部が目指す人材像]

- (1) 人間の思想、歴史、言語、社会について広く学修し、それらについての深い素養を獲得した上で、自己を相対化し多様性を理解する能力を修得するとともに、自他を問わず、個を尊重する視点を身につけていること。
- (2) 身につけた素養と視点を基盤として、文献読解、資料分析、実験・調査といった実証的研究手法に依りながら、特定の課題について自らの考察と見解を論理的に提示する論考をまとめる訓練を通じて、人類文化の継承と発展、さらにその創造に寄与しうる能力を身につけていること。

(1)は、東京大学が目指す人材として身につけるべき重要な素養としての「公共性」に繋がるもので、文学部における教育が全学的な教育的意義の模範となる意義をもつことに他ならない。文学部には4学科を設け、各学科の下に専修課程を設置する(資料10-2)。各学科の教育目的は資料10-3のとおりである。

#### <資料10-2 東京大学文学部規則(抜粋)>

<b>思想文化学科：</b> 東西にわたる人間観と思想・宗教文化の理解
哲学、中国思想文化学、インド哲学仏教学、倫理学、宗教学宗教学、美学芸術学、イスラム学
<b>歴史文化学科：</b> 各地域における人類の営みの歴史的・文化的理解
日本史学、東洋史学、西洋史学、考古学、美術史学
<b>言語文化学科：</b> 古今東西の人類の諸言語と文学的文献の理解
言語学、日本語日本文学、中国語中国文学、インド語インド文学、英語英米文学、ドイツ語ドイツ文学、フランス語フランス文学、スラヴ語スラヴ文学、南欧語南欧文学、現代文芸論、西洋古典学
<b>行動文化学科：</b> 人間と集団の認知、行動と心理、社会の文化・諸制度の理解
心理学、社会心理学、社会学

<資料 10-3 学科の教育目的>

学 科	教 育 目 的
思想文化	思想文化学科の教育は、西洋、中国、インド、日本、イスラム等の各文化圏にわたって展開された人類の思想文化的遺産を探究し、もって人類普遍の価値の実現に寄与する人材の養成を目的とする。
歴史文化	歴史文化学科の教育は、地球上の各地域に存在するそうした一次史料を正確に理解する能力を鍛錬し、それによって歴史事象についての考察を深め、また歴史を学ぶことを通じて現代の社会・文化に対しても批判力を持ち、新たな文化の創造に貢献する人材の養成を目的とする。
言語文化	言語文化学科の教育は、諸言語を科学的に考究し、また文学的なテキストの精読を通して人間とその多様な言語文化に関する深い理解と洞察力を涵養し、その知見を生かして社会のさまざまな分野に貢献する人材の養成を目的とする。
行動文化	行動文化学科の教育は、そうした現象を解明するための実験、調査、観察、資料分析等の方法を習得させながら、諸現象と理論的・実証的に取り組むことをつうじて社会や人間を見る目を養い、広い視野をもって人類文化の発展に寄与する、社会的に有為な人材の養成を目的とする。

2. 文学部の特徴

学生は3年次からゼミに所属し、少人数の演習形式のもと自由な議論と発想で学ぶことができることが、文学部の教育の特徴である。2010年度以来、文学部への進学者状況については、全体としてほぼ定員枠を維持している（資料 10-4）。

<資料 10-4 学科ごとの学生定員と進学者数（ ）内は編入学定員>

学 科	定 員	進 学 者 数					
	2004年度以降	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
思想文化	90	70	69	75	70	53	55
歴史文化	60	95	86	79	84	75	71
言語文化	160	87	86	85	92	74	68
行動文化	40 (10)	96	97	99	97	96	96
計	350 (10)	348	345	338	343	298	290

[想定する関係者とその期待]

想定する関係者としては、(1) 人文・社会科学の学修をめざす学生を想定し、これらの学生は幅広い教養と専門的知識の修得を期待している。(2) 本学部の卒業生を受け入れる一般企業等は、それぞれの現場で特定の専門知識を超えた広い教養と高度な知識を有する公共概念を身につけ、指導的役割を担いうる人材を期待している。

II 「教育の水準」の分析・判定

分析項目 I 教育活動の状況

観点 教育実施体制

(観点に係る状況)

すでに述べたように、これまでから主体的な学びを大きく掲げ、それを実現できる環境として少人数制のゼミ形式を中心的な教育体制としてきた。文学部は多様な専門分野の専門教育を行う専修課程から構成されており(資料 10-2 ; P10-2)、2015年5月時点の教員数は資料 10-5 の通りである。学部学生に対する教員比は2015年度は5.4で、2009年度の5.8と大きく変わらない。

<資料 10-5 各学科の教員数>

専攻名	教授			准教授			講師			助教			外国人教師	特任研究員	専任教員計	
	専任	女性	特任	専任	女性	特任	専任	女性	特任	専任	女性	特任				
基礎文化研究専攻	21	(1)		6	(1)		1			4	(1)				32	(3)
日本文化研究専攻	11	(1)		4	(1)		0			2	(1)				17	(3)
アジア文化研究専攻	12			6	(1)		0			3					21	(1)
欧米系文化研究専攻	17	(4)		10	(1)		1			6	(2)		[1]		34	(7)
社会文化研究専攻	6	(2)		4	(1)		0			2					12	(3)
文化資源学専攻	2			1	(1)		0			1	(1)			①	4	(2)
韓国朝鮮文化研究専攻	3			1			0			1				①	5	
次世代人文学開発センター	6	(1)		0		①(1)	0					④(2)			6	(1)
北海文化研究常呂実習施設	0			1			0			1					2	
死生学・応用倫理センター	0		①	1		①(1)	0			0					1	
国際交流室・教育研究情報管理室・情報メディア室	0			0			2	(1)		0					2	(1)
計	78	(9)	①	34	(6)	①(2)	4	(1)	①	20	(5)	④(2)	[1]	②	136	(21)

※○書きは特任教員で外数。  
 ※[ ]は外国人教師で外数。  
 ※( )は女性教員数で内数。  
 ※外数の特任研究員は、旧外国人研究員。

教育実施体制を担う教員を採用するに際しては、業績はもちろんのこと、教員構成の多様性についても配慮してきた。専任教員(教授・准教授・講師)の10.5%が一般企業等(常勤職)での経歴をもち、また83.3%が東京大学以外の教育研究機関での職歴をもっている(資料 10-6)。

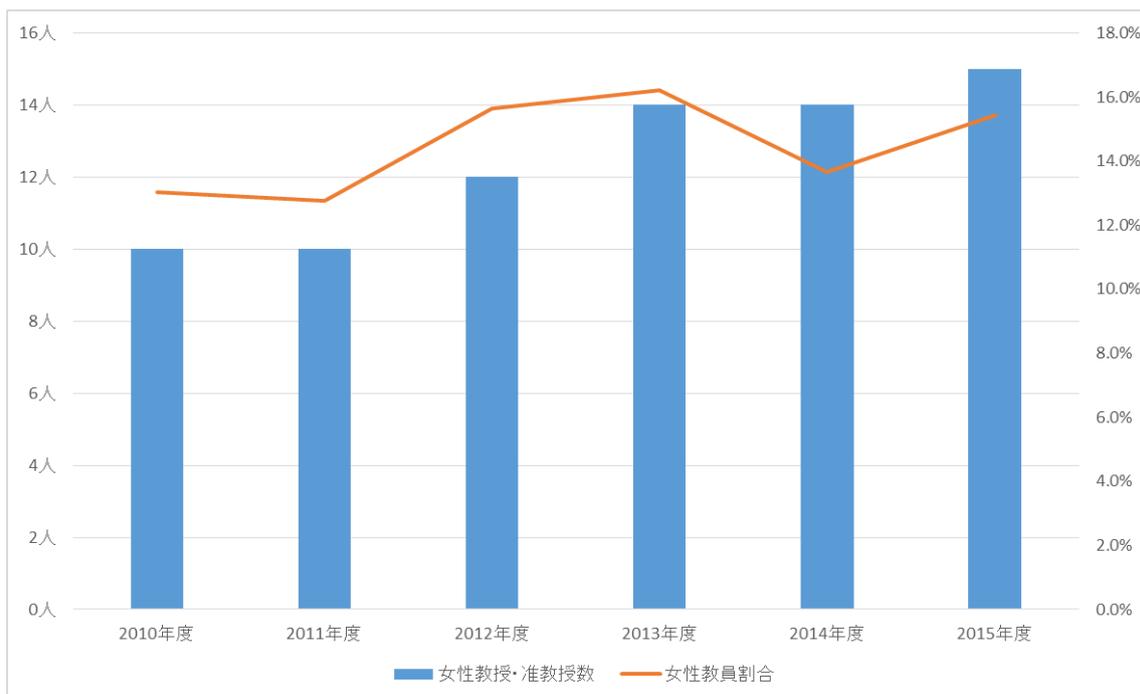
<資料 10-6 講師以上の教員の経歴(2015年度5月時点)>

(単位:人) 2015年5月1日現在

経歴	教授	准教授	講師	計
① 東大以外の教育研究機関(常勤職)	65	29	1	95
② 一般企業等(常勤職)	3	2	0	5
③ ①と②の両者	5	2	0	7
④ 東大のみ	5	1	1	7
計	78	34	2	114

※官公庁(省庁・地方公共団体等)、財団法人は、一般企業等に含めた。

<資料 10-7 女性の教授・准教授数の変化>



助教を含む専任教員中の女性の割合は 2015 年 5 月時点で 15.4%である。時系列的な変化をみると（資料 10-7）、2010 年度は 13.0%であったので、5 年間で 2.4 ポイント上昇した。特に、女性の教授、准教授数の変化をみてみると（棒グラフ）、10 名から 15 名と一貫して上昇している。2009 年度、女性の教授・准教授数は 11 名、専任教員に占めるその割合は 7.4%であったが、2015 年度の対応する値は 15 名、11.0%と着実に伸びている。

また、この他に、学内の他学部・研究所所属の教員 13 名と学外の 41 名が、大学院との共通授業として、学内非常勤 27 名、学外非常勤 50 名が本学部教育に従事し、多様な視点からの授業が提供されている（資料 10-8）。

<資料 10-8 兼任教員数 (2015 年度 5 月時点) >

(単位:人) 2015年4月1日現在

所 属	学 部	大 学 院		共 通
	非常勤講師	非常勤講師	担当 (人社主担当)	非常勤講師
研究科(学内)	3	0	0	10
研究所、センター等(学内)	10	0	23	17
他大学(国立大学法人)	9	2	0	13
独立行政法人	0	2	0	3
地方公共団体	0	0	0	0
私立大学、企業等	32	6	0	34

研究所、センター等(学内)の内訳

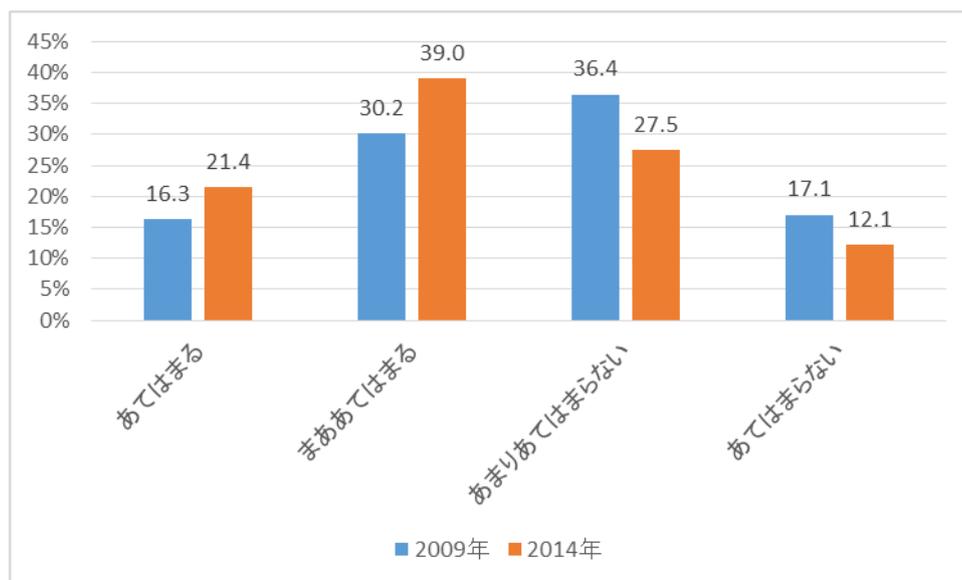
所 属	学 部	大 学 院	共 通
	非常勤講師	担当 (人社主担当)	非常勤講師
東洋文化研究所	1	9	5
史料編纂所	3	9	5
先端科学技術研究センター	0	0	1
国際本部日本語教育センター	0	1	1
埋蔵文化財調査室	2	1	2
総合研究博物館	4	2	2
情報基盤センター	0	1	1
合 計	10	23	17

教員に加えて、演習、実験などを中心に授業内容の習得を確実にするため、ティーチング・アシスタント (TA) を適宜配置している (資料 10-9、10-11)。TA は必要な専門分野の知識と経験を具えた本学の大学院学生である。資料 10-10 は、本学の大学総合教育研究センターが実施している「大学教育の達成度調査」の文学部学生による回答結果である。現時点で入手可能な最新データである 2014 年調査結果によると、6 割近くが「TA が機能していた」と高く評価しており、2009 年の 46.5% よりも上昇している。全学結果と比較しても (2014 年結果で、47.5%)、文学部における TA に対する評価は高く、TA を導入することの効果が認められる。

<資料 10-9 TA による授業補助内容の例>

社会学専修課程：進学が内定した前期課程学生に対して、15 名ほどの小グループに分けて、社会学の古典文献を中心に紹介、解説、議論。  
 日本史学専修課程：授業準備にあたっての学生たちの相談や質問への対応。  
 西洋史学専修課程：授業補助とともに卒業研究に関する相談対応。  
 考古学専修課程：実測・計測を習得するにあたっての授業補助。

<資料 10-10 TA が機能していたか>



<資料 10-11 TA 採用実績>

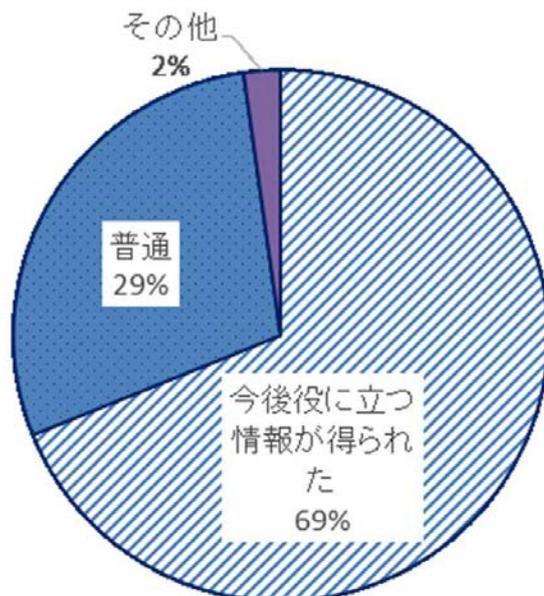
年度	2010	2011	2012	2013	2014	2015
TA採用数	109	114	116	111	119	115

採用後も教員の質を確保するために、ファカルティ・ディベロップメントの一貫として、各種の講習会を開催している（資料 10-12）。2015 年度はハラスメント全般に関する講習会をハラスメント相談所の相談員を講師に迎え開催した。出席者は教員 89 名、職員 8 名であった。例えば、2015 年 9 月に開催された「キャンパスにおけるハラスメント防止」に関する研修会ではアンケートによると（資料 10-13）、有益な情報を得ることができたとした者が 7 割近くあった。

<資料 10-12 講習会の開催状況>

2010 年 10 月 7 日	ファカルティ・ディベロップメント講習会
2011 年 3 月 3 日	ファカルティ・ディベロップメント講習会
2011 年 7 月 21 日	ハラスメント相談員による研修会
2014 年 1 月 15 日	発達障害に関する研修会
2014 年 7 月 24 日	ハラスメント相談員による研修会
2015 年 9 月 10 日	ハラスメント相談員による研修会

<資料 10-13 ハラスメントに関する研修会アンケート結果>



新任教員に対しては、文学部の教育理念と体制についての理解を深め教育・研究倫理の周知と学部教育に係る事務手続き（予算執行含め）についての研修会を着任早々に開催している。また、教員間での情報交換や経験豊富な先任教員から情報を効率的に得るために、「文化交流茶話会」を年5～6回開催し、特に新任教員にとっては新しいネットワーク形成のよい契機となっている（資料 10-14）。

<資料 10-14 交流茶話会のトーク・テーマと参加者（研究科教職員）数>

2010年度		発表者	トークのテーマ	参加者数
6月10日	第19回	設楽 博己	入墨から推測する邪馬台国の位置	25
		浦 一章	トルクワート・タツソの3つソネットをめぐって	
7月8日	第20回	蓑輪 顕量	日本仏教における修行道の展開—止と観の視点から—	26
		安藤 宏	表現機構としての「文壇」—日本の近代小説の場合—	
10月7日	第21回	佐川 英治	中国古代の都城遺跡を歩く	22
		下田 正弘	仏教学の歴史	
11月4日	第22回	小林 正人	フィールドからみる言語史—インド高地のドラビダ系言語をめぐって	20
		柳橋 博之	イスラーム圏における「著作」の誕生	
1月20日	第23回	諏訪部 浩一	フォークナーと暴力(小説)	19
		塚本 昌則	言葉と写真—ロラン・バルト『明るい部屋』を中心に	
2011年度		発表者	トークのテーマ	参加者数
6月23日	第24回	小松 久男	イスラーム地域研究の成果と展望	22
		藤原 聖子	津波のとき神は何処にいたのか?—神義論概念の再検討—	
7月7日	第25回	葛西 康德	Compliance and Defiance in Ancient Greece	18
		出口 剛司	〈希望〉はいかにして生成したか—エーリッヒ・フロムとドイツ系ユダヤ人の近代	
10月6日	第26回	牧原 成征	日本近世身分論の原点	21
		大宮 勘一郎	ヴァルター・ベンヤミンの翻訳論再考	

東京大学文学部 分析項目 I

2012年度		発表者	トークのテーマ	参加者数
5月10日	第27回	村本 由紀子	離島漁村『寝屋慣行』の維持と変容:社会心理学からのアプローチ	24
		高岸 輝	土佐光信と室町絵巻	
6月7日	第28回	祐成 保志	ハウジングとホームの社会学	21
		高橋 典幸	鎌倉幕府の成立をめぐる	
7月4日	第29回	島田 竜登	近世バタヴィア奴隷考	19
		勝田 俊輔	「イギリス史」・アイルランド史・3国史	
10月4日	第30回	梶原 三恵子	聖なる「ことば」の伝承 — 古代インドのヴェーダ学習者たち	21
		会田 薫子	実証研究と医療倫理 — 胃ろう問題を題材に	
2013年度		発表者	トークのテーマ	参加者数
5月9日	第31回	堀江 宗正	地獄をなくした死後の世界——現代のビジュアル・イメージから	21
		頼住 光子	道元を読む	
6月6日	第32回	池田 嘉郎	幸福なモスクワ	23
		西村 明	隔たりへの感受性—遺骨収集・戦地巡礼への宗教学的アプローチ	
7月18日	第33回	菊地 達也	イスラム教シーア派におけるメシア主義とその神話化	14
		村上 郁也	錯覚と眼球運動と視野安定	
10月10日	第34回	高木 和子	源氏物語のからくり	27
		柴田 元幸	初期アメリカ新聞漫画について	
11月7日	第35回	柳原 孝敦	中継地点としてのリオデジャネイロ	15
		鉄野 昌弘	『万葉集』戯笑歌の世界	
2014年度		発表者	トークのテーマ	参加者数
5月8日	第36回	三谷 恵子	ウクライナ—ボスニア:国が消えて国境が残る物語	13
		A. Charles Muller	高麗—朝鮮における仏教・儒教間の対立	
10月9日	第37回	向井留実子	国際結婚移住女性に対する文字学習支援	15
		亀田 達也	ヒトの高次共感と正義判断の認知・神経メカニズムをめぐる	
2015年度		発表者	トークのテーマ	参加者数
5月14日	第38回	三浦 俊彦	「観測選択効果」の視点による進化芸術学の可能性	18
		河村 英和	芸術家の聖地としてのカプリ島	
10月15日	第39回	齋藤 希史	言は意を尽くさず——ことばの向こう側について	20
		松田 陽	史跡にならずに消えた名所—本郷の富士山	

また、本学に入学したすべての学生が1～2年次に所属する前期課程において、文学部の教育目的である人間と文化の本質について一定の理解が得られるよう、前期課程の全学期に文学部教員が出講し、多くの科目を開講し、それらの科目に触れる機会を提供している（資料10-15）。

<資料10-15 文学部教員の前期課程出講状況> (2015年現在)

年度	学期	専門科目	総合科目	全学自由研究 ゼミナール	初年次 ゼミナール	展開科目
2010	夏	11	14	2		
	冬	47	6	2		
2011	夏	19	13	2		
	冬	61	4	1		
2012	夏	13	12	1		
	冬	61	2	2		
2013	夏	15	12	0		
	冬	62	2	2		
2014	夏	16	13	1		
	冬	69	1	1		

年度	学期	専門科目	総合科目	全学自由研究 ゼミナール	初年次 ゼミナール	展開科目
2015	Sセメスター	19	14	0	6	5
	S1	0	0	0	0	0
	S2	1	0	0	0	0
	Aセメスター	66	4	0	0	1
	A1	3	0	0	0	0
	A2	4	0	0	0	0

- 専門科目…後期課程各学部が当該学部進学者向けに前期課程2年次に開講する専門科目
- 総合科目…前期課程の全科類共通で開講される選択必修科目
- 全学自由研究ゼミナール…前期課程の全科類対象に開講される少人数制のゼミナール形式の授業
- 初年次ゼミナール…1年次前半に開講される少人数制の文理別の基礎科目
- 展開科目…1年次後半以降に開講される「基礎科目」での学びをさらに主体的に展開させるための習熟度別授業

学修指導上、図書室は重要である。文学部3号館図書室の平日の開室時間を午後9時までとし、さらに、土曜日も午前10時から午後6時まで開室し、学生に主体的な学修を促す環境を整えている。蔵書冊数は約111万冊、利用実績として学部・大学院の学生を合わせて年間入館者数は28,504人、貸出冊数は14,854冊であり(2014年度)、学生の要求に十分応えるものとなっている。

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

教育実施体制を担う教員の多様性という観点から、専任教員のうち女性比率が2015年度15.4%と全学の12.4%と比べて高く、教育を提供する教員が多様な背景をもつことは、教育を受ける側にもプラスの効果を期待することができる。

また、TAを通して、きめ細かい教育が実施されている。「大学教育の達成度調査」(大学総合教育研究センター実施)の文学部に関する結果によると、「TAが機能していた」と回答した割合は2009年度の46.5%から2015年度は60.4%へと大きく上昇した。

教育の質の保証という点においては、専任教員が主導的役割を担い、兼任教員によって本学部の教育を補佐、補充するスタイルを堅持している。また、専任教員のうち教授・准教授・講師の1人あたりの学生現員は2015年度5.4人となっており、少人数制の教育体制を堅持している。

文学部教員による前期課程出講は、第1期中期目標期間中の2009年度において専門科目の出講は1年を通じて49科目であったが、2015年度は92科目と倍近く増加し、学士課程教育の一貫性に貢献している。

### 観点 教育内容・方法

(観点に係る状況)

文学部の教育遂行にあたっては、人間の思想、歴史、言語、社会について広く学修し、特定の課題について自らの考察と見解を論理的に提示する論考をまとめる訓練を重視している(資料10-1; P10-2参照)。この方針を実現するために、文学部の授業形態は、主として講義、演習、卒業論文・特別演習指導の3種からなる。科目数では、講義が73.2%、演習が12.5%、卒業論文・特別演習指導が14.3%である(2015年度)。また、専修課程ごとに卒業に必要な単位数を科目の種類別に設定しており、必修科目、選択科目の構成は、学科及び専修課程ごとに異なるが、単位数で見るとほぼ半々になっている(別添資料10-1「文学部卒業要件一覧」)。

## 東京大学文学部 分析項目 I

前期課程 2 年次秋（2A1 ターム、2A セメスター）以降～後期課程 3 年次では、「史学概論」、「西洋哲学史概説」などの概論・概説を基礎的な必修科目として履修させ、さらに演習や特殊講義の履修を通じて専門的な学識の涵養を図るとともに、4 年次の卒業論文作成（一部特別演習履修）に至るまでの学修が体系的に行われるよう配慮している。

また、文学部への進学後は外国語の高い運用能力が求められるため、文学部進学後も随時語学教育を提供している。例えば、スラヴ語スラヴ文学専修課程では、チェコ語やボスニア・クロアチア・セルビア語、ポーランド語の授業があるほか、多様な言語について習熟度別の授業を提供している。語学の授業では、2015 年度、42.9%の履修者が他学部 of 学生であるなど、文学部のみならず、他学部学生への語学教育の機会も提供している。また、他学部からの履修者割合は、2009 年度 4 割であったのに比べ漸増している。

文学部においては、必修科目の充実をはかるのみならず、選択科目履修の自由度を高め、他専修課程、他学科、さらには他学部の科目履修が容易となるように配慮している。他学部学生 of 履修に対しても門戸を開き、他学部からの履修学生は、例えば 2015 年度の「概論・概説」1,324 名、「講義」にいたっては 3,542 名にも及んでいる（資料 10-16）。

### <資料 10-16 履修状況（2010 年度から 2015 年度）>

年度	講義区分	文学部		人文社会系研究科		他学部		他研究科	
		履修者	取得者	履修者	取得者	履修者	取得者	履修者	取得者
2010	概論・概説	2739	1754	94	59	561	276	55	33
	講義	10345	5905	268	172	2104	1095	156	74
	演習	2282	1873	124	102	125	83	26	20
	実験・実習	170	154	11	9	13	2	3	2
	外国語	548	329	68	36	374	244	109	67
2011	概論・概説	3064	1901	120	80	718	382	66	34
	講義	10700	6135	294	166	2560	1472	211	106
	演習	2175	1813	117	96	129	104	30	22
	実験・実習	180	167	13	12	3	3	2	0
	外国語	466	295	67	40	327	237	98	64
2012	概論・概説	2925	1767	110	66	732	362	64	29
	講義	10350	5831	253	171	2712	1424	234	143
	演習	2250	1840	111	98	165	118	29	20
	実験・実習	139	133	22	19	8	4	14	8
	外国語	451	322	38	29	326	224	110	66
2013	概論・概説	2686	1653	65	47	589	323	76	45
	講義	9188	5536	222	162	1659	976	206	128
	演習	2127	1777	108	86	103	81	28	21
	実験・実習	172	153	8	8	13	5	5	5
	外国語	522	372	53	45	375	288	119	74

年度	講義区分	文学部		人文社会系研究科		他学部		他研究科	
		履修者	取得者	履修者	取得者	履修者	取得者	履修者	取得者
2014	概論・概説	2383	1533	71	49	562	321	63	27
	講義	8559	5334	189	122	1777	1100	174	107
	演習	1979	1731	89	79	125	98	22	19
	実験・実習	145	129	8	7	12	5	16	14
	外国語	496	367	59	42	339	266	76	55
2015	概論・概説	1324	863	37	21	530	299	32	17
	講義	3542	2285	87	65	864	580	110	70
	演習	1294	1149	72	67	58	52	10	9
	実験・実習	64	61	7	7	4	4	1	1
	外国語	246	189	18	13	185	138	51	34

「自己を相対化し多様性を真に理解する視点」(資料 10-1、P. 10-2 参考)は文学部の学生のみならず、東京大学全ての学生に期待される「公共性」に通じるものであり、そこで本学部が教育上果たす役割は大きい。2015年度は53科目を全学部に向けて開講した。全学向け授業プログラムとして設置しているプログラムは以下の4つが挙げられる。

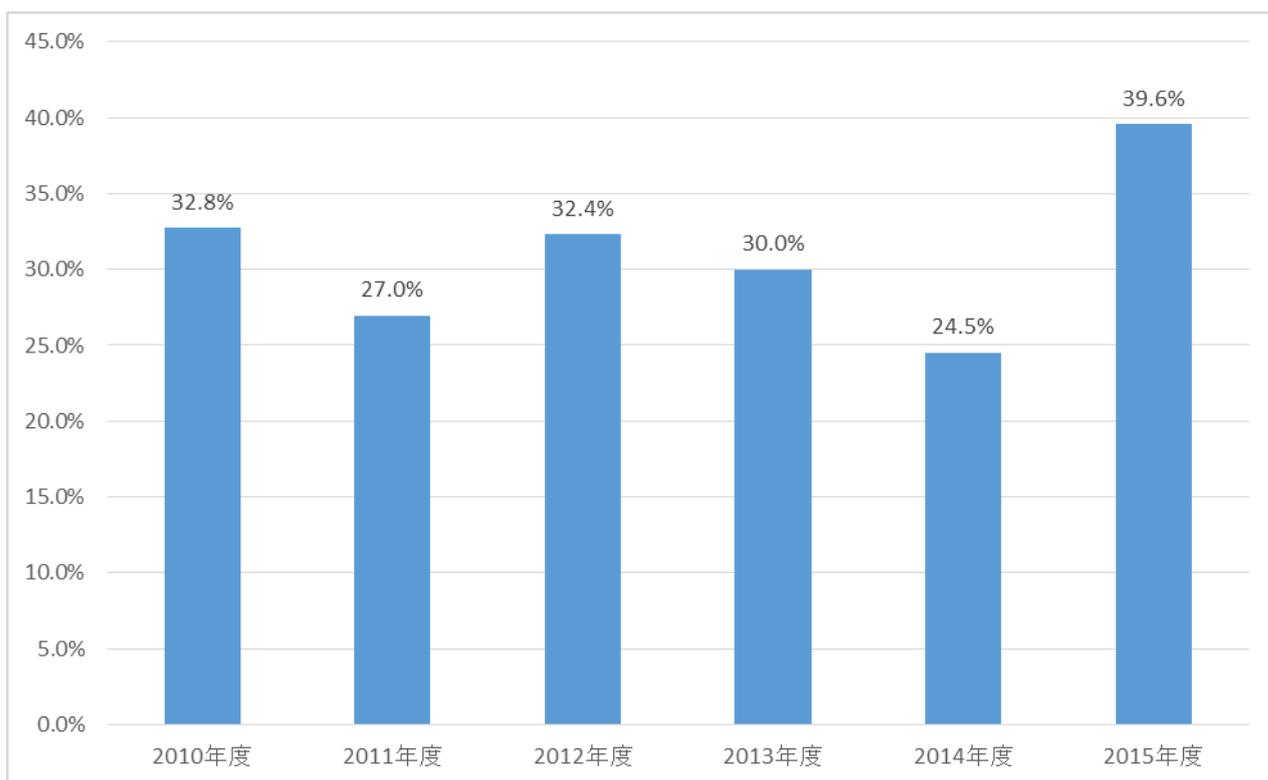
第1に、前期課程を含む東京大学のすべての学部学生を対象とする「原典を読む」は、2002年以來開講しており、古今東西の古典や重要文献を購読形式で味読するという教育目的で、多様な興味をもつ学生向けに毎年度開講されている(資料 10-17)。他部局からの受講者割合は2015年度4割近くあり、特に大学院(人文社会系含む)からの受講生が28.6%と多いことが目立つ(資料 10-18)。学部にあっては、法学部、経済学部、工学部からの履修者が見られる。2009年度、他部局からの履修者は24.5%であった。

<資料 10-17 「原典を読む」2015年度開講科目>

担当教員	科目・趣旨
藤井省三 (中国語中国文学)	「ノーベル文学賞作家、莫言の短篇集を読む」 2012年のノーベル文学賞は、中国作家の莫言(モーイエン、ばくげん、1955~)に授与されました。莫言さんが川端康成の影響下で書いた中国農村物語とは何か、ガルシア・マルケスに触発されて如何なる中国魔術的リアリズムを創造したのか、如何にして魯迅文学と接続し断絶したのか、突如としてトルストイ『アンナ・カレーニナ』(安那・カレニ娜)が登場するのはなぜか……莫言文学における中国農民のみずみずしい感性と人民共和国の黒い霧への冷徹な眼差しに注目しつつ、初期短篇集を読みましょう。
重藤実 (ドイツ語ドイツ文学)	「エーリッヒ・ケストナーの『ティル・オイレンシュピーゲル』を読む」 ケストナーには、伝説などの素材をもとに書いた子供向け物語もいくつかある。この授業では、民衆本に基づく『ティル・オイレンシュピーゲル』をドイツ語で読む。比較的平易なドイツ語を正確に読むことを第一の目的とするが、民衆本(『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』、阿部謹也訳、岩波文庫)と比較し、ケストナーの子供向け物語の特徴も考察する。
大宮勸一郎 (ドイツ語ドイツ文学)	「R.ムージール『三人の女たち』を読む」 Musilの物語を精読することで、ドイツ語の読解力を深めてゆく。

担当教員	科目・趣旨
月村辰雄 (フランス語フランス文学)	「ギユラーグ伯『ポルトガル尼僧の手紙(ポルトガル文)』を読む」 スタンダールの『恋愛論』やドニ・ド・ルー・ジュモン『愛について』などで情熱恋愛の典型として名高い恋愛書簡の名作を講読する。17世紀後半、ポルトガル駐留のフランス軍士官が土地の修道女と激しい恋に陥るが、士官は突然フランスへ帰ってしまう。修道女が彼の不実をなじり、しかし、なじりながらも苦しい思いを訴えるその書簡は、真実の恋の結晶として長いあいだ人々を感動させてきた。それが、あるフランス人外交官の創作であると結論付けられたのは近年のことである。この逆転のドラマを背景に、フランス古典主義の傑作を丁寧に読み解いてゆきたい。
柳原孝敦 (現代文芸論)	「ホルヘ・ルイス・ボルヘス『伝奇集』を読む」 ホルヘ・ルイス・ボルヘス(1899-1986)の短編集『伝奇集』(1944)は完結にして美しい文体で、実に多くを示唆した豊かな文学作品である。翻訳を通じて読む者はその文学史上の意義は感得することができるだろうが、残念ながら文体上の技巧を実感することは難しい。本講ではそんなボルヘス作品を味わいながら精読することとする。
葛西康德 (西洋古典学)	「『法学提要Institutiones』を読む」 本授業は、ユスティニアヌスの『法学提要』をテキストとして、参加者全員で購読し、担当者が毎回割り当てられた部分を読解、説明することを通じて、西洋古代社会の基本骨格、さらにはそれをモデルに作り上げた西洋社会の基本骨格について、大まかな見通しをもつことを目的とする。法学作品は法学のためだけにあるのではなく、社会を理解する重要な資料である。法学著作はテクニカルな用語に妨害されて、法学を学んだことのない人には敬遠されがちであるが、これはとてももったいないことである。ぜひ、いろいろな専攻の学生が参加してくれることを期待している。
古井戸秀夫 (文化資源学)	「歌舞伎の所作事を読む」 歌舞伎の代表的な舞踏曲を読みます。

<資料 10-18 「原典を読む」部局外履修者割合>



第2に、東京大学の後期課程の学部学生すべてを対象とした「文学部の後期教養教育」を2015年度から開講している。「人文知へのいざない」として、「もう一度学びなおす古典」、「ことばと人間—カテゴリー化と世界の捉え方」、「翻訳の創造性」の3つのリレー式講義を提供している。

第3に、2011年に発足した「死生学・応用倫理教育プログラム」は、死生学と応用倫理に関する学際的教育を構築するための学部横断型の教育プログラムである。同プログラムは、必修科目(概論)、必修選択科目(演習)、選択科目の3種類の授業からなり、合計12

東京大学文学部 分析項目 I

単位以上の履修をもって修了が認定される(資料 10-19)。2015 年度の修了者は、文学部 1 名、教育学部 1 名であった。修了を目的としない、個別科目の履修も可能である。授業の履修者数は 1 講義で 100 人を超えるほど好評であり、例えば 2015 年度、「死生学概論」242 名、「応用倫理概論」116 名の履修者があった。

<資料 10-19 部局横断型「死生学・応用倫理教育プログラム」2015 年度開講科目>

	科目	担当教員	単位数	期間	曜時限
科 必 目 修	死生学概論(死生学の射程)	清水哲郎ほか	2単位	S1,2	木曜2限
	応用倫理概論(応用倫理入門)	池澤優ほか	2単位	S1,2	金曜3限
選 択 必 修 科 目	死生学演習 I (臨床死生学・倫理学の諸問題)	清水哲郎・会田薫子	2単位	A1,2	水曜6限
	死生学演習 II (悲嘆の文化)	堀江宗正	2単位	S1,2	木曜1限
	死生学演習 III (死生学基礎文献講読)	池澤優	2単位	A1,2	金曜3限
	死生学演習 IV(1)(生命倫理の現在(1))	会田薫子	2単位	S1,2	火曜5限
	死生学演習 IV(2)(生命倫理の現在(2))	会田薫子	2単位	A1,2	火曜5限
	応用倫理演習 I (生命倫理の超克へ)	小松美彦	2単位	A1,2	水曜4限
	応用倫理演習 II (P.シンガーの生命倫理研究)	一ノ瀬正樹	2単位	S1,2	火曜5限
	応用倫理演習 IV(世代間倫理は可能か)	堀江宗正	2単位	A1,2	木曜1限
選 択 科 目	死生学特殊講義(死生学の射程(続))	清水哲郎・会田薫子	2単位	A1,2	木曜2限
	死生学特殊講義(臨床死生学原論)	清水哲郎	2単位	A1,2	水曜3限
	死生学特殊講義(質的研究法)	会田薫子	2単位	S1,2	火曜4限
	死生学特殊講義(ケアの現象学の展開)	榊原哲也	2単位	S1,2	金曜5限
	死生学特殊講義(死生学の理論)	堀江宗正	2単位	S1,2	火曜2限
	死生学特殊講義(事例から読み解く生きづらさ)	大塚類	2単位	S1,2	火曜4限
	応用倫理特殊講義(臨床倫理学原論)	清水哲郎	2単位	S1,2	水曜3限
	応用倫理特殊講義(中国宗教と環境倫理)	池澤優	2単位	S1,2	月曜5限
	応用倫理特殊講義(終末論的思考と希望の倫理)	堀江宗正	2単位	A1,2	火曜2限
	応用倫理特殊講義(生命と環境の倫理)	桑子敏雄	2単位	A1,2	月曜4限
	応用倫理特殊講義(在宅医療の現象学的な分析)	村上靖彦	2単位	A1,2	集中
	特別講義医事法	樋口範雄・児玉安司・米村滋人	2単位	S1+2	金曜2限
	家族看護学	上別府圭子・佐藤伊織	2単位	冬 (12/11 ~2/5)	金曜3/4限
	生・権力論と教育	金森修	2単位	S1+2	金曜3限
	西洋教育史概説	川本隆史	2単位	A1+2	月曜6限
	生命倫理	正木春彦ほか	2単位	S1+A1	月曜5限
	技術倫理	正木春彦ほか	2単位	A2+W	月曜4限
	応用倫理学概論	石原孝二	2単位	A1+2	曜時限未定
	特殊講義 文化の社会科学	市野川容孝	2単位	A1+2	曜時限未定
	科学技術リテラシー論 II	松本真由美	2単位	A1+2	曜時限未定

第 4 に、英国のセインズベリー日本藝術研究所と連携した、日本の考古学と歴史文化遺産を体験的に学ぶ夏期特別プログラムと、英国の考古学と歴史文化遺産を学ぶ冬期特別プログラムを 2014 年度から開催している(資料 10-20)。参加後の学生レポートでは、海外

大学の学生、本学の学生ともに、専門を越えて貴重な経験を得ることができたと、好評を得た。

<資料 10-20 冬期特別プログラム概要>

	
期間	2週間 (2016年2月13日～26日)
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前講義 (英語) : 5週間のオンラインレクチャー (各週2時間程度)</li> <li>・ロンドンやノリッチでの史跡、博物館・美術館見学、講義等</li> <li>・英国学生との交流</li> </ul>
参加学生	10名 : 東京大学から文学部3名 教養学部2名 ヨーロッパから、University of East Anglia, University of Reading, University of York, University of Tübingen, University of Zurich, 各1名

伝統的な教育体制を重視しつつ、今日的な養成に応えるように、積極的な努力を行っている。事実、これまでも新しい研究動向に対応する専門分野横断型の「多分野講義」を開講し、旧来の各国語別・縦割りの理念に拠らない「現代文芸論」専修課程を設置した。第2期中期目標期間においては、2015年度に分野を超えた教養としての人文学の新しい形のありかたを探る「集英社 高度教養寄付講座」を開講した (資料 10-21)。

<資料 10-21 集英社 高度教養寄付講座開設講義 (平成 27 年度) >

授 業 科 目	担 当 教 員		履 修 者 人 数		
	職 名	氏 名	合計	文学部	他学部
英語で書かれた現代小説を訳す ／読む	特任教授	柴田 元幸	29	18	11
現代英語圏小説入門	特任教授	柴田 元幸	19	14	5
ヨーロッパ文化論 (1)	特任准教授	河村 英和	71	59	12
ヨーロッパ文化論 (2)	特任准教授	河村 英和	45	35	10
ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』 を読む	特任教授	高橋 和久	31	26	5

本学部では、2009年度から2012年度まで日本学術振興会の助成を得て「次世代人文社会学育成プログラム」を実施し、4年間に学生を含む計135名を世界各地の大学や研究機関に派遣し、帰国後は報告会を開催して高い成果を認めることができた。このことから、「実証的研究手法に依りながら、特定の課題について自らの考察と見解を論理的に提示する論考をまとめる訓練」（資料10-1、P.10-2参考）を通じて能力を養うに理想的な環境を提供し、その成果を上げたといえる。また前述のとおり、2014年度より夏期特別プログラムと冬期特別プログラムを開始するなど、学生への国際交流の機会を拡充する取組を行っている。

さらに、本学部では留学生を対象に、大学院入試に向けた専門分野を考慮した日本語教育を実施している。また、留学生の学習支援をするためのチューター制度や、本学部国際交流室が中心となって開催している留学生対象の親睦旅行、留学生による作文集『ぎんなん』の発行など、日本語教育に留まらない活動を行っている。タームごとに留学生の学習状況に関する詳細な報告を指導教員に提供し、きめ細かい指導を可能にしている。

2015年度Aセメスターからは、文学部の学生に向けた「研究倫理入門」を開講した。ここでは、思想、歴史、文学、社会という4つの分野からの教授陣がオムニバス形式で前半は講義、後半は与えられた課題を解く実習形式で授業が進められ、人文社会系分野における研究倫理に関する基礎的考え方を学ぶ機会を提供している。

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

本学部の教育内容は、基礎的な専門教育に加えて、新たな学問分野の構築を模索する学部横断的な教育プログラムや集英社高度教養教育プログラム、さらに文学以外にも広く門戸を開放している後期教養教育、死生学・応用倫理教育プログラムなど、積極的に新たな教育のあり方を常に試みている。例えば「死生学概論」履修者では100名以上の受講者があり、過半数が他学部からの受講生であるなど、文学部に限らず様々な学部から多数の学生が受講している。これは、学部を横断した学生たちの関心の高さが反映された結果である。外国語の授業では、他学部からの履修が多く、文学部履修生との割合は、2009年度34.0%から2015年度42.0%へと上昇しており、文学部が東京大学の学士教育に貢献している1つの証拠である。

また、「次世代人文社会学育成プログラム」や「全学交換留学プログラム」を通して、積極的に留学経験を積む学生が増えている。学部留学生は2015年度15名と全学生の1.8%にすぎないが、2009年度5名であったことを考慮すると、倍以上に増えている。また、学部独自のサマープログラムも2014年度より新規に開始するなど、留学機会の提供を推進している。このように、教育の場を学外にも広げ、インターンシップや実習などの教育方法も取り入れて、幅広い教養を身につけるよう工夫してきた。

以上のことから、文学部の教育内容および方法は、学生によって期待される水準を上回るといえる。

## 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

### 観点 学業の成果

(観点到に係る状況)

文学部では、専門科目について84単位の修得を卒業要件とする。卒業生は平均して90単位程度を取得しており、同値は第1期中期目標期間と比較して大きな変化はない。授業のための予習・復習の時間を確保する観点からも妥当な値である(資料10-22)。

<資料 10-22 卒業までの在籍年数・平均取得単位および退学率>

	2010年度			2011年度			2012年度			2013年度			2014年度		
	2年	3年	4年～	2年	3年	4年～	2年	3年	4年～	2年	3年	4年～	2年	3年	4年～
卒業までの 在籍年数と人数	226	89	26	217	92	23	232	84	25	211	68	29	231	93	27
卒業生の 平均取得単位数	90.6			91.4			90.7			92.0			90.0		
学生の退学率	2.3%(21)			1.0%(9)			0.9%(8)			2.3%(21)			1.7%(15)		

※卒業までの年数は、前期課程からの進学者が対象。学士入学、再入学、転学部を除く。

※平均取得単位数は、「卒業までの年数」欄に該当した者の取得単位数を合計し、人数で割ったもの。

小数点第2位以下は四捨五入。

※学生の退学率について：退学者は依願退学及び命令退学した者。退学率は退学者を当該年度4月1日現在の学生数で割ったもの。

小数点第2位以下は四捨五入。

※( )内は退学者数

<資料 10-23 退学理由>

理 由	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
経済上	1	2	0	3	2	1
健康上	0	1	2	4	3	0
進路変更	5	1	1	2	3	4
学業不振	15	5	5	9	6	7
その他	0	0	0	3	1	0
合 計	21	9	8	21	15	12

前期課程から文学部に進学した者のうち、2年で卒業する者の比率は、2010年度以来、3分の2程度である。その背景には海外留学経験の増加もあり、標準修業年限内で卒業すること以上の経験を学士課程において獲得できたとするプラスの効果もある。これはまさに、一律のルールに沿うだけでは得がたい多様な経験ともつながり、「タフな東大生」として否定的な側面だけではない。退学した者の比率は年によって変動はあるものの2%、あるいはそれ以下の低い割合を維持しており、2014年度は1.7%であった。第1期中期目標期間の2009年には該当する値は2.6%であったことから、退学者割合は半減以上の低下であり、本学部の教育の成果の一つである。退学理由を詳細に見てみると、2010年度以来、学業不振者の数は減少傾向にあり、その他の理由に大きな変化は認められない。(資料 10-23)。

学生の卒業論文は、他大学や他学部における修士論文に匹敵するほど学術的水準が高いものも少なくなく、卒業論文以外にも高い社会的な評価を得るような実績を残す学部学生が多い。たとえば、2015年度に日本史学専修課程において27本の卒業研究論文が提出されたうち、学会誌『地方史研究』に掲載された論文(資料 10-24)は、対外的にも高い評価を得た論文と言える。

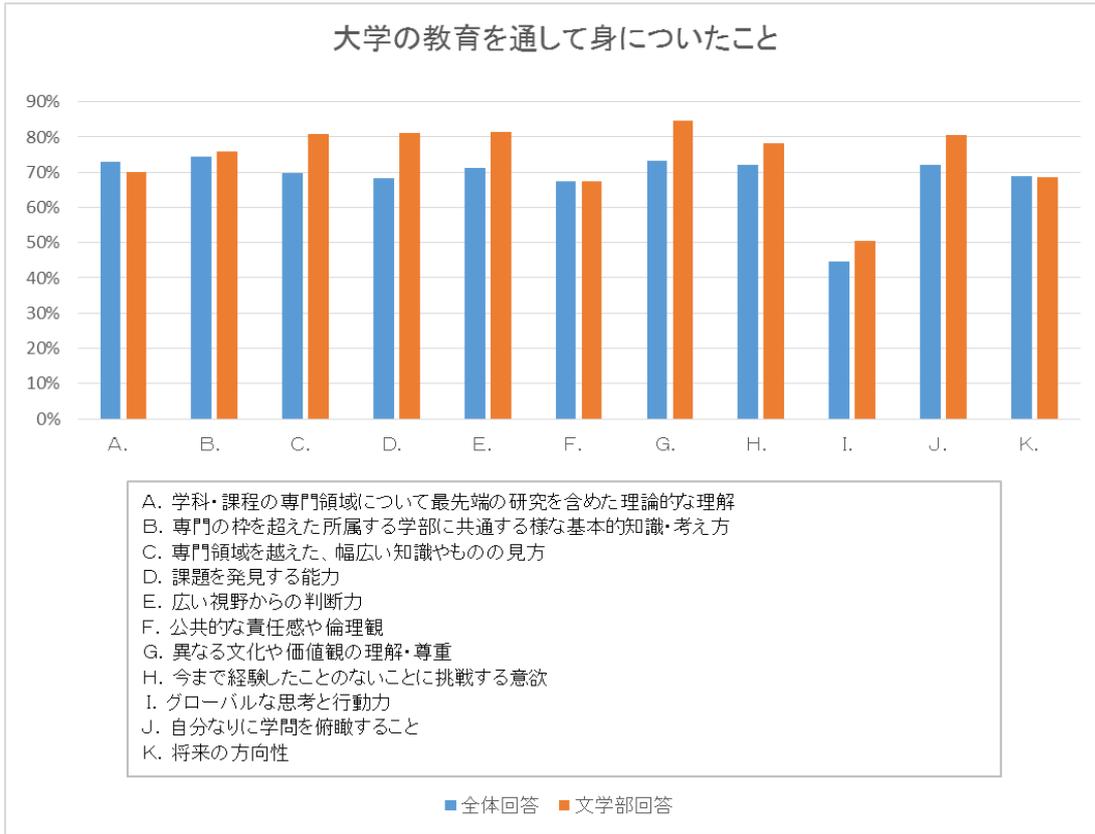
<資料 10-24 地方史研究協議会「日本史関係卒業論文発表会」に選ばれた東京大学卒業生の報告・評価一覧>

年月日	回数	会場	発表者	題目	『地方史研究』誌上での評価
2010.4.17	第51回	駒澤大学	中西啓太	日露戦後の地方名望家―埼玉県における所得税調査委員に注目して―	先行研究では内務省系統の政策からの考察が主だったのに対して、所得税調査という大蔵省系統の政策を通して日露戦後の地域社会を描いたという点でとても意欲的な報告(第346号)
2011.4.16	第52回	駒澤大学	畑山周平	戦国後期の島津家権力―当主と重臣との関係を中心に	当主と重臣の関係について、従来より多角的な視点で見ていく必要性を強調した(352号)
2012.4.21	第53回	國學院大學	小池勝也	日光山と鎌倉幕府	東国社会の政治的動向と宗教史の観点から日光山がどのような歴史的存在であったのかについての報告(358号)
2013.4.20	第54回	駒澤大学	小田切悠紀	中近世移行期の島津家の都鄙交渉について―道正庵との関係を通じて―	丹念な史料読解と実証的な研究に学ぶべきところが多かった(364号)
2014.4.19	第55回	大正大学	福元啓介	近世屋久島における鹿児島藩の支配と在地社会	従来の屋久島研究でなされた自治体史の範疇を越えた議論を展開した(370号)
2015.4.18	第56回	駒澤大学	坂井武尊	肥前国松浦党一揆の紛争処理に関する考察	五島一揆に着目して、その紛争処理の実態や一揆の質的変遷について検討された(376号)

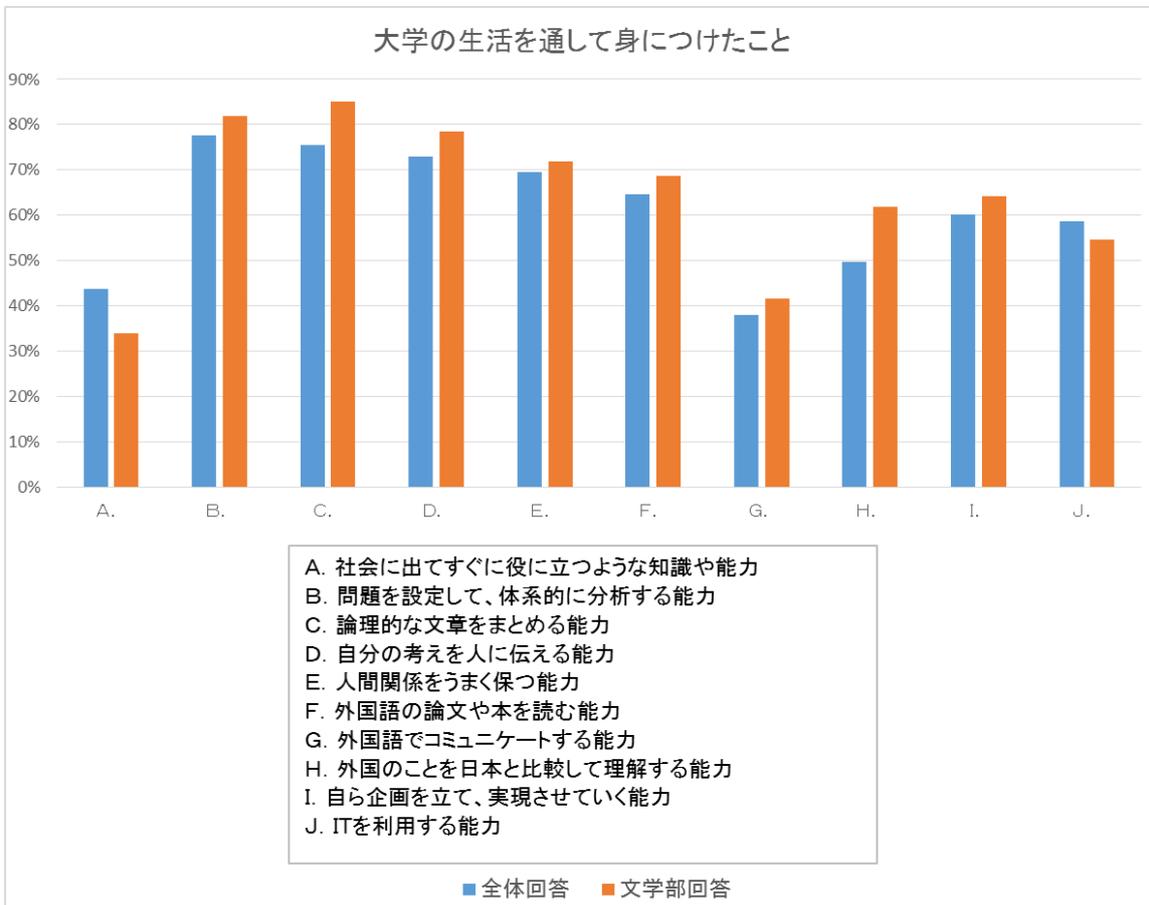
2014年度の卒業生を対象に行われた「大学教育の達成度調査」において、大学教育を通じて身についた事項として、「広い視野からの判断力」(81.5%)、「公共的な責任や倫理観」(67.3%)、「異なる文化や価値観の理解・尊重」(84.2%)、「グローバルな思考と行動力」(50.7%)の値が、全体に比べて高い(資料 10-25)。本研究科が目指すグローバル人材とは、公共的な責任観をもち、異なる文化や価値観を尊重して、広い視野にたった判断を下すことができる、グローバルな思考と行動力の持ち主である。上記の事項について身についたと回答した学生が多かったという結果は、本学部の教育効果とみなすことができる。

また、大学生活の中で身についたとする事柄についても(資料 10-26)、論理的に考えて体系的に物事を分析する能力や外国のことを日本と比較して相対的に理解する能力が身についたとする学生が文学部において多く認められる。ここでの結果はまさに、学部教育の総合的改革が謳っているグローバルな視点をもち、公共的な思考ができる人材の育成につながる評価すべき結果である。

<資料 10-25 「大学の教育を通して身についたこと」>



<資料 10-26 「大学の生活を通して身につけたこと」>



(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

2014年度の卒業生は216人で大学院への進学者の78.9%となり、2009年度の該当値51.3%から大きく向上した。また、最近の傾向として留学に伴って修業時期を延長する者が増え、2014年度は進学者のうち7.8%となった。これは、学生がよりグローバルな体験を積み、標準修業年限内では果たしえない貴重な経験をすることに通じる。事実、資料10-25と10-26で示したように、文学部の学生の8割以上が卒業時に、異なる文化や価値観を理解し、尊重するようになったとの学修成果を表明している。

文学部の学生は「外国語でコミュニケーションする能力」が身についたとする者の割合が41.6%であり、全学の値34.8%より高い。また、文学部における2009年の値は31.5%であったので、外国語によるコミュニケーション能力の習得に向上が認められた。さらに、「外国のことを日本と比較して理解する能力」は文学部生の場合61.9%が身についたとしているのに対して、全学の値は49.5%であった。また、広い視野からの判断力、公共的な責任感や倫理観、異なる文化や価値観を理解・尊重する能力が身についたと回答した者が、全体に比べて文学部は多く認められた。

以上から、学業の成果は期待される水準を上回っているといえる。

**観点 進路・就職の状況**

(観点に係る状況)

2014年度卒業生において、大学院進学者は26.7%であり、2010年度の30.1%に比べると減少しているが、それは社会全体の傾向とも連動している。就職者については、製造、広告、コンサルタント、金融保険、商社流通や建設不動産など、その進路先がより広範囲になっている。また、官公庁に就職する者も2009年度卒業18名から2015年度28名に増えた。その他2009年度と2015年度を比較してみると、製造業22名から33名へ、金融保険17名から39名へ、建設不動産5名から15名へ、そしてサービス業7名から21名へと、全体に卒業生の活躍の場が拡大したことが窺える。(資料10-27)。

<資料10-27 卒業生進路状況>

		2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度
進学者内訳	大学院	94	75	70	88	84
	大学学部	0	1	1	2	3
	研究生	0	0	0	1	3
進学者総数		94	76	71	91	90
就職先内訳	製造	27	29	39	16	33
	印刷出版	12	7	9	9	6
	新聞	4	7	7	4	6
	放送	8	9	5	6	8
	電気ガス	6	3	6	0	7
	広告	5	3	6	10	13
	情報通信	35	27	33	19	18
	コンサルタント	5	7	9	8	11
	金融保険	22	37	28	30	37
	商社流通	15	13	9	13	21
	建設不動産	8	10	5	14	15
	運輸郵便	5	4	9	8	8
	サービス	28	22	27	19	21
	教育	10	8	14	12	13
	官公庁	20	19	26	12	28
その他	8	5	1	5	2	
就職者総数		218	210	233	185	247

文学部では、2015年2月から3月にかけて、就職先の関係者から卒業生に対する評価や要望等の聞き取り調査を行った（別添資料 10-2 卒業生就職先聞き取り事例）。個人に対する評価なので内容は個別的であるが、文学部出身者が持つコミュニケーション能力やリーダーシップを取る資質が高く評価されていた（資料 10-28、10-29）。

<資料 10-28 卒業生就職先聞き取り事例>

**聞き取り先：** A 株式会社  
**日時：** 2015年3月30日  
**対象者：** 歴史文化学科美術史学専修課程（2013年度卒業）Yさん  
**聞き取り相手：** K.Y.氏（同社エネルギー事業グループ管理部・天然ガス事業チーム）

卒業生 Y 氏は 2015 年 3 月にロシア・中東の LNG 事業を前任者より仕事の引き継ぎを受け、4 月より本格的に担当している。学生気分の抜けない新入社員もいる中、早期から社会人としての常識（言葉づかい、上司とのコミュニケーション）を備え、仕事に優先順位をつけて効率よく業務を遂行している。美を追求する美術史学を学んだためか、自らの思考を理論的に構築し、意見を冷静に述べ、議論することができる。

会計や語学といった実務に必要な技術は、入社してからの研修で身につけることができる。総合商社では、その果たすべき役割（ミッション）を見出し、社会と会社の将来のビジョンを描くことが重要である。そのためには物事を深く掘り下げ、真理を探究する哲学的な思考力が強く求められる。東京大学文学部には、「深さ」のある人材の輩出を期待する。

**聞き取り先：** B 株式会社  
**日時：** 2015年3月19日  
**対象者：** 行動文化学科心理学専修課程（2013年度卒業）Tさん  
**聞き取り相手：** T.O.氏（同社シニアコンサルタント）

プロジェクト自体は昨年7月から稼働していたが、Tくんはそこに後から加わったかたちでメンバーとなった。彼の現在の主たる役割は、システムのユーザーである顧客担当部署のニーズを把握すべく、先方との意見交換・情報収集に努めることだが、彼は常に積極的に動き、十分な成果を挙げてくれている。

今の仕事を進めていくうえで重要な能力には2つある。ひとつは、人の話を正しく聞いてニーズを的確に理解する力であり、もうひとつは、先を見据える眼を持ち、積極的に顧客を説得し、正しく誘導する力である。顧客は必ずしも、自らのニーズをすべて明示的に把握できているとは限らない。すなわち、潜在的なニーズを掘り起こすための働きかけが重要になる。彼には今後ともこうした力を磨き、常にチャレンジする姿勢を保ち続けてほしい。

大学時代に学んだ一連の卒業研究のプロセスは、仕事のうえで大いに役立つものであると感じる。自分のテーマを見つけて仮説を立て、データに基づいてそれを検証することはもとより、データ収集のために周囲に協力を依頼すること、種々の期限を守るべくきちんと計画して物事を進めること等々、いずれも仕事をするうえで重要な基礎である。

<資料 10-29 卒業生就職先聞き取り事例>

**聞き取り先：** A 社（保険会社）  
**日時：** 2015年3月8日  
**対象者：** 思想文化学科哲学専修課程（2013年度卒業）Nさん  
**聞き取り相手：** 本人

文学部で学んだ知識が直接に業務に役立った経験はまだないが、卒論を通じて身につけた文章力・表現力・論理的展開力は大変役に立っている。会社で働いていると、かなりの頻度でアウトプットを

求められるが、いくら優れた考えがあっても、周囲の人々・上司に納得してもらえなければ実現できない。課題を簡潔に示し、論理の流れを整理して情報を伝える力は社会人に必須のスキルだと感じている。これについては文学部での学びが大いに役立っている。

在学中にもっと学んでおけばよかったと思うことはあまりないが、あえていえば語学力である。それでも、文学部での学びが直接に会社生活で役立つ必要は全く無いと思う。大学は就職予備校ではなく、学問の場ですので、自分が望む職に就くための努力は個人ですべきだろう。文学部は就職に不利と一般に言うが、私はそこまでそれを感じなかった。

**聞き取り先：** 株式会社 B（出版社）

**日時：** 2015年2月20日

**対象者：** 歴史文化学科考古学専修課程（2012年度卒業）Uさん

**聞き取り相手：** 本人

考古学を専攻することで学び、いまの仕事の上で最も重要に感じているのは、論理的な物事の考え方である。東京大学の学部の授業では、考古学を学ぶための方法論を学修するものが多く、仕事をする上で、他者に自分の考え方を伝えるために、客観的な根拠を積み上げることの重要性は、考古学研究の考え方から学んだ。

大学時代は他の専修課程の授業や、実験などを伴う実習に、より積極的に参加すればよかったと考える。社会人になってからでは、仕事以外の知見を養うのは容易ではないこともあり、多様な学科が揃う、文学部の授業をより活用するべきだったと思う。

（水準）期待される水準を上回る。

（判断理由）

卒業生のうち多くは、ほぼ希望どおり、進学、就職し、その就職先業種も2009年度卒業生に比べて拡大している。特に、製造業、金融保険、サービス業、官公庁などへの就職が増えた。また、職場の上司からの聞き取り調査を実施すると本学部卒業生への評価は高く、共通して強調された事柄は、幅広い教養と考える力が実際に仕事をする上で大いに役立っているという点であった。入社後でも獲得できる実用的知識というよりは、仕事の基礎となりうる教養、素養の広さの重要性が強調され、文学部出身者が持つコミュニケーション能力やリーダーシップを取る資質が高く評価されるとともに、当初の期待を上回る活躍をしていると、評価は大変高い。

以上から、卒業生の進路・就職の状況は関係者の期待に添う水準を上回っていると判断できる。

### Ⅲ 「質の向上度」の分析

#### (1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

文学部では、各分野の専門教育を学部後期課程として提供すると同時に、専門分野の枠組みにとらわれない新しい教育と研究の開発を追求している。従来の「原典を読む」に加え、第2期中期目標期間に新たに「死生学・応用倫理教育プログラム」(2011年度～)、「文学部の後期教養教育」(2015年度～)、「集英社 高度教養寄付講座」(2015年度～)、「夏期・冬期特別プログラム」(2015年度～)、を全学向け授業として公開し、文学部内に留まらない教育を展開している。

また、グローバル教育という観点から、積極的に留学経験を積む学生が増えている。学部留学生は2015年度で15名と全学生の1.8%にすぎないが、2009年度に5名であったことを考慮すると増えている。

以上、これまでの専門分野を次世代に継承する基礎教育の充実と共に、各専門分野の先端的動向を踏まえた新たな研究分野に触れる教育体制を構築させてきたという点で、文学部における教育活動は、質的に大きく向上したといえる。

#### (2) 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

少人数教育を柱とする文学部教育の履修は、「大学教育の達成度調査」結果からも、「広い視野からの判断力」(81.5%)「公共的な責任や倫理観」(67.3%)「異なる文化や価値観の理解・尊重」(84.2%)の習得につながっている。「後期課程で学んだこと」に対する満足度は、2014年度時点で86.6%と全学の79.9%と比較しても高く、2009年度調査の85.2%よりも若干上昇した。

文学部の学生の8割以上が卒業時に、異なる文化や価値観を理解し、尊重するようになったと学修効果を表明している(資料10-25)。さらに本学部生は「外国語でコミュニケーションする能力」が身についたとするのが50.7%と全学の値44.6%より高い。また、同値は2009年度の結果では31.5%であったので、外国語によるコミュニケーション能力の習得に向上が認められた。

卒業後の就職先は2014年度では、2009年度よりも業種が増え、製造、広告、コンサルタント、金融保険、商社流通や建設不動産などへの就職が増えてきた。また、官公庁に就職する者も2009年度卒業に比べ倍以上いた。

以上、これらの文学部における幅広い思想・歴史・文学・行動文化を専門とする素養は、就職先の分野を広げ、各界のリーダーとなりうる人材を輩出している。これらは、学部教育の成果として高く評価することができ、教育成果の質の向上を実現しているといえる。